



第2号

2014年
12月25日発行

活躍する卒業生の女性

有吉 保

名簿が無い。従ってOBの活躍が身近に感じられない。これは私一人だけの感情ではあるまい。そこで、私の身辺で目覚ましい活躍をしている方々を紹介し、OBとの繋がりを感じて欲しいという思いで記した。

研究者では、同級生で伊原昭（昭和26卒）さんがいる。和洋女子大学教授から梅光女子大学の大学院教授になられた方で、『日本／文学 色彩用語集成上代・中古・中世・近世』（笠間書院刊）をはじめ、色彩と文学の関係の名著が多く、この分野での権威者の存在である。安藤亨子（昭和38卒）さんは、和洋女子大学の教授であつた方で、『物語そして枕草子』（桜楓社刊）や源氏物語の研究者である。大伏春美院（昭和45卒）さんは、徳島文理大学教授で、『女房三十六人歌合の研究』（新典社刊）の著書があり、女性歌人についての研究者で、近く東京に帰って来る由で、優しい物腰で接してくれる方である。鹿野しのぶ（平成4卒）さんは、新著『冷泉為秀研究』（新典社研究叢書）が完成し、益々研究に熱中している筈で、学生は相談に行くことよい。

書道の方面で活躍している方に、御手洗京子（昭和43卒）さんがい

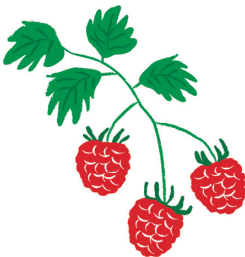
る。朝日新聞に勤めていて、朝日新聞に連載されていた植物図鑑の「花おりおり」で植物名を書いていた書家（芹早秋）で、昨年奥野カルタ店刊『花おりおり 芹早秋書』があり、書家として個展なども催し活躍している。

出版関係では、唐沢満弥子（昭和62卒）さんがいる。角川書店の編集部には重役で名編集部長であつた永持道明（昭和34卒）さんがおられた関係で多くのOBがいた。永持さんは『新編国歌大観』の角川側の編集の代表者であつた。

翰林書房社長今井肇（昭和38卒）さんと同氏夫人静江（昭和53卒）さんは編集担当である。夏目漱石関係の名著も多く、同氏は漱石資料のコレクターでもある。夫人静江さんは、装丁や挿絵も書ける才女である。卒業者の出版書籍も多い。私もその一人で拙著『歌人の風月―西行の桜、定家の風の色』でお世話になった。

私の身辺の若い研究者に市橋さやか（平成17卒）さんがいて、付属の櫻丘高校教諭である。同校非常勤講師の高橋優美穂（平成22卒）さんは大学院に在籍、大いに将来を期待されている（思い出すままに記しました。誤脱をお許しください）。

『元国文学科教授』



OB・OGだより

日大文理出身者として

小沼 竹男

在学当時は、枕草子研究会に所属し、学部から修士課程（昭和49年修了）まで国文で学びました。「国文通信」で国文と卒業生を繋ぐとされている阿部教授とは修士課程まで同窓でした。今回、阿部教授から原稿をというお話をいただいたので修了後について書いてみます。

私は、故郷茨城県に戻り、高校の教員としてスタートしました。研究の対象は国文学から授業研究へと変わりましたが、在学時、塩原の大学寮で教授や博士課程の先輩等に指導していただいたことは、私の実践の支えとなりました。その後、県教育研修センター、県教育庁指導課、高校教育課の指導主事などを経て高校の校長を最後に退職しました。この間、茨城県高等学校文化連盟の会長として文化部活動全体の振興に携われたことは、やりがいのあることでした。

また、文部省（現文部科学省）の指導資料作成協力者に委嘱され、文部省に通いながら刊行物の作成にも関わりました。教科調査官と文部省の公共刊行物作成に関わり、全国の先生方の授業に生かしていただく機会を得たことは貴重なことでした。指導主事時代も含め国公立大出身の方が多かったのですが、常に日大の文理出身者として自負心をもって生活して来しました。現在は、日本国語教育学会の理事・茨城支部副支部長として国語教育に関わっています。

後輩の皆さんの全国での活躍を心から期待しています。

〔昭和47年国文学科卒業〕

大切なこと

近藤 博七

私は、東京発の夜行バスで山形へ向かっていました。平成二十三年三月。東日本大震災直後。途が「東北」へさしかかると急に「街の灯」が減り、やがて見えなくなりました。震災による停電が原因でした。すべての列車が止まり、高速道路も不通となっていました。予想したよりも、はるかに深

刻な現実が胸に迫ってきました。暗闇の中、いつ到着できるのかさえわからない「旅」を続けていました。

今どうしても行かなければならない。この目で見たい。四月赴任することになった同僚付属校、日本大学山形高等学校を。生徒、教職員の様子を。一刻もはやく知りたい。知らずにはいられないという思いがその時の私を駆り立てたのです。

春、私は教職員在校生とともに多くの新生を迎えました。「自分が生きていることの喜び。そのことへの感謝。」その心を大切にしたいと話しました。「生かされている自分にはなすべきことが必ずある。今生きているという実感を大切にしてほしい。」と繰り返し伝えました。止まぬ余震、不安。同じ体験をした者同士、互いによく理解し合い、努力してくれました。

その後、生徒は目覚ましい成長を遂げ、学業、進学、部活動等自らの手による「復興」がはじまっていたのです。

誰にでも忘れたくない過去があり、同時に忘れてはならない「大切なこと」がある。

今、日本大学豊山女子高等学校・中学校にて語り続けています。「大切なこと」を。

〔昭和49年国文学科卒業〕

私の時間

光澤（石本） 菊子

得意な国語が活かせるかもしれない、と教職をめざして入学したものの、なぜかプログラムになり、十年近く働いて結婚。出産を機に退職して以来十二年、育児中心の慌ただしい毎日を送っています。

私にとって大学とは何だったのか、と顧みれば、確かに良き友人には恵まれたけれども、バイトに明け暮れ、学業に関しては不勉強のまま。罪悪感はいいのほか深く、今でも「単位が足りない!」と焦る夢を見るほどです。この度、『国文通信』創刊号を拝見し、ホームカミングデーの記事に目がとまりました。卒業後は研究熱心な人以外は大学とは縁がなくなる、そう思っていた私のような卒業生にも門が開かれていることを知り、嬉しく思ったのです。

さて、現在の私は小学生の息子と娘に手を焼きながら、近所の子供たちを対象にピアノの初歩を教えています。これは教員になりましたかっただけ私にとって貴重な経験です。個性をみながら、今どきの集中力の途切れやすい小学生を相手に指導することは、なかなか骨の折れる作業です。それでも最終

的に、弾けるようになったと喜ぶ子供たちの笑顔を見ると、苦勞も吹き飛び、やりがいを感じます。私だけのささやかな時間ですが、学生時代の夢がこんな形で少しだけ実現したようにも思えます。

人に関わることの難しさは痛感するものの、その大事さ、ありがたさに感謝する毎日です。これからもできることは精一杯やっていこうと気持ちを新たにしています。

〔平成5年国文学科卒業〕

人生七十古来稀

竹内 光夫

タイトルに掲げた杜甫の曲江詩は、無意識のうちに同窓会での話題の底に流れている。だから「病氣・畑・孫」がテーマになる。これが先輩達になると、「お寺・戒名・お墓」に変わる。自分はこうしたテーマで話すこともないので、仕方なく大学生であることを打ち明ける。

通信教育部の国文に編入したのは平成20年。仕事上の知人で、超日本通のオランダ人に刺激されたことが契機となった。同年、夏期スクーリングの国文学演習で『猿蓑』

を学んだ。入学間もなくの授業はどれも楽しかった。昔は60年安保闘争デモとバイトでろくに授業も出なかった。ずっと仕事ばかりで本も読まなかったからなおさらである。この時の演習は特に楽しかった。初日に先生の解説があつたあと、一週間学生の発表と質疑応答が続いた。先生から社会人の入った演習は活発であるとの評価を頂く。数年後、先生には「つたりお会いすると」「まだいたのか?」とある意味励ましの声を掛けていただいた。さらに今年初め、突然先生からお電話を頂き、この原稿を引き受ける羽目になった。

今は卒業と同時に史学科に入り、3年目を迎える。文学作品を読んでいるとそれを書いた作家の生きた時代背景がとても気になり、歴史も勉強してみたくなった。これは当初の路線。歴史を学んでいると、仕事で行ったことのある場所が登場することが多く、つい引き込まれてしまう。もう少し「稀」を楽しみたい。

〔平成24年文学専攻（国文学）卒業〕



談話室

眞贋を超えるもの

永岡 健右

文章を書くこうとすると何かしら資料と称するものゝ厄介になることが多い。資料として活用できるか不可かの検証から論文などでは使えないが、こんなものもあるんだという面白半分で書き記したいものに出っ食わすこともある。私が数年前に入手した葉書を紹介してみよう。

昭和三十年代から四十年代にかけて、文理学部、とりわけ国文学科で学んだ方々にとって窪川鶴次郎先生の御名前は馴染深いことだろう。文芸思潮論や近・現代文学等を講じられた。この窪川先生宛に太宰治が投函した私の所蔵する葉書もそうした一枚の資料かも知れない。

その葉書の宛名は「東京都神田区三ノ二九 昭森社『思潮』編輯局 窪川鶴次郎様」とあり、「四月二十日」の日付で、住所と差出人に「青森県金木町 津島文治 方 太宰治」とある。私製葉書でペン書き、

切手を貼った形跡はなく、不鮮明な消印があり、下部の方に「GHQ」の検印が押されている。切手が貼られず、私製葉書に不鮮明な消印という条件はいかにもコピーされた偽造物らしく見える。だが、その筆跡はまぎれもなく見なれた太宰のそれである。太宰治全集の書簡集などにも収録されていない。「GHQ」は第二次世界大戦後、連合国側が日本占領中に設置した総司令部で、その検印を受けていたことになる。戦後の「四月二十日」で、太宰が津軽の生家に滞在していた時となれば、「昭和二十一年四月二十日」ではない。

次に、窪川先生が『思潮』の編集に関わった時期といえば、昭和二十一年三月創刊の第一号から三号までで、その第二号（昭21・10。但し、奥付や表紙・裏表紙にそれぞれ異なった発行日の記載あり。戦後直後の混乱した状況を読み取れる）に太宰の「雀」が掲載されている。取り敢えず葉書の本文を引いてみよう。

拝啓 その後も御健闘の事と推察仕ります。今月はじめに短編を一つお送り致しました筈ですが、もう雑誌に掲載になりましたでしょうか。短篇集を作りたいと思つてゐますので、掲載誌をど

うか御恵送下さいまし。まだ掲載になってみませんでしたらたいいてい掲載誌の発刊がいつ頃になる見込か、ちよつと御知らせ下さいまし。不一

この太宰の「雀」に関連した窪川先生宛の葉書が山内祥史によつて紹介されている。『雀』草稿時の葉書「二通」『太宰治研究』第二号。和泉書院刊、平成8・1である。その二通は、金木町から「東京都豊島区雑司ヶ谷一ノ五号『思潮』編輯部 窪川鶴次郎」宛に投函されているという。昭和二十一年一月二十五日付が「本日、拙稿十九枚別封書留速達」の送り状、もう一枚は二月九日付で、原稿料「貳百八拾五圓」の受け取り証となつている由。こうしたやり取りの中では、自作の掲載誌が発行されたか等の問合せは極く自然のやりとりに見える。

高校時代から八雲版太宰治全集にのめり込み、学生時代は稲毛の御自宅に押しかけたり、窪川先生の後について度々、下高井戸や浅草橋などの喫茶店で共にコーヒーの時間を過ごせた身としては、この葉書が「談話」の種にふさわしく「宝物」に見えるから不思議である。

〔元通信教育部教授〕

読

書

案

内



「捕物帳」の世界

金子 明雄

「捕物帳」は不思議な文芸ジャンルである。科学的捜査や論理的思考に馴染みのない社会・時代をわざわざ舞台に選んで、そこであえて「探偵」を試みる。そのような逆風の中を進む挑戦は、現代社会とは異なる舞台で物語展開の自由さを確保できる利点や、その世界で唯一人「推理」を駆使する探偵役のキャラクターを際立たせる利点、あるいは現実社会では失われた風物や人情を前景化できる利点を報酬にしているように思われる。

このジャンルの嚆矢となった岡本綺堂『半七捕物帳』（大正六年）は、シャーロック・ホームズばりの論理的思考と江戸風物へのノスタルジアの共存を見事に具現するシリーズである。江戸末期に岡つ引として活躍した半七老人の昔話を青年新聞記者が記録するというシリーズ全体の設定は、近い時期に創作された芥川龍之介の「開化もの」の設定（対象となる時代は少し現代に近づくが）と重なる。聞き手となる青年にとつて、体験したことのない近過去の世界が、懐かしい理想世界として浮上してくる構図が同時代の文学とつながっているのだ。

佐々木味津三『右門捕物帖』（昭和三年）や野村胡堂『銭形平次捕物控』（昭和六年）は有名だが、見逃すことのできない「捕物帳」を生み出している作家は少なくない。

複雑に絡み合った物語を端正な文体で知的に展開し、熱烈なファンも多い久生十蘭には、エレキテル

の復元修理で知られる奇才平賀源内を探偵役にした『平賀源内捕物帳』（昭和十五年）、異様に長い顎をもった奉行所勤めの下級官吏が活躍する『顎十郎捕物帳』（昭和十四年）のシリーズがある。十蘭自身は「探偵小説らしきものは一篇だつて書いたことあない」とうそぶいているが、大胆な出来事の構築とその論理的な解体を要件とする「探偵小説」は、十蘭の資質に適合しているように思えるし、そこに背景となる江戸の四季が折り込まれ、軽妙な会話劇としての側面が加われば、十蘭ワールドの出現は間違いないところである。なお、実作者であり、ミステリー批評家・編集者としても活躍した都筑道夫は、顎十郎ものを『新顎十郎捕物帳』（昭和五九年）として甦らせている。都筑のオリジナル『なめくじ長屋捕物さわぎ』（昭和四四年）と共に忘れがたい。

『不連続殺人事件』の作者でもある坂口安吾には、隠居した勝海舟が登場する『明治開化安吾捕物帖』（昭和二年）がある。明治初期という歴史の転換点のノスタルジア抜きのドキュメンタリーとしての評価もあるこのシリーズでは、ナイフで自分の頭を切つて「悪血」をしぼりながら推理する勝海舟が、実は「迷」探偵で、本物の名探偵に先を越されて毎回負け惜しみを言うというパターンが痛快である。

一種のテンプレートを活用して異世界を動的に造形する「捕物帳」の世界にふれてみてほしい。

〔国文学科教員〕



辻ゼミ

(辻勝美先生担当。金曜5限)



辻ゼミでの研究対象は中世文学です。とくに散文を中心とした作品とその作家たちを取りあげています。これまでも「中世の旅と文学」を主要課題としてきましたが、ゼミ生たちの興味関心によって自由に作品・作家を選ぶことが認められているので、実際は必ずしもそのテーマに沿うものばかり

ではありません。卒業論文として取り組む研究内容も以下のように多様です。

最近五年間では、『方丈記』『徒然草』などの随筆文学、『東関紀行』『十六夜日記』とばかりが『藤河の記』『都のつと』などの日記紀行文学を取りあげた論文が多かったといえます。また、『平家物語』『太平記』『義経記』などの軍記物語の登場人物(源義経・平重衡・建礼門院、北条高時ら)についての論、西行・長明・兼好らの草庵作家に関する伝記的調査や享受史的研究なども目につきます。さらに、熊野信仰や大江山酒吞童子、鬼や怪異を題材とした絵巻など、説話・伝承文学の領域に関する作品のほか、御伽草子(鉢かづき・浦島太郎など)・中世王朝物語(いはいでしのぶ・あきぎり・しら露など)についての研究もありました。

ゼミは自分たちで決めた役割分担によって企画、運営されています。まとめ役の幹事・副幹事のほか、研究発表・質疑討論の進行担当、コンパ・実地見学などの企画担当、記録・編集担当など、それぞれに協力しあって活動しています。さらに数年前から当ゼミ出身のTAが加わり、適切な助言指導が受けられるようにもなりました。このTA制度はゼミ生・院生双方に有益な結果をも

たらしめています。また、軽井沢研修所・山中湖セミナーハウスなどの厚生施設を利用した夏期合宿も恒例行事の一つです。

右のような諸活動の記録は小冊子にまとめて後輩たちにも伝えていくようにしています。それも、ただの記録ではなく、調査研究や論文執筆の参考となるような「成果報告集」をめざして取り組んでいます。そうした日々の努力や体験の積み重ねが、学問・研究だけでなく、ゼミ生たちの様々な成果に結びつくことを願いながら、活動しています。

(辻ゼミ編集担当)



◆ 2014年9月1日～3日 辻ゼミ夏合宿 ◆
上段：軽井沢研修所 下段：湯川キャンプ場

国文学科ヒストリー②

1952年（昭和27年）

- 1月23日 ラジオ放送による初の国会中継
- 3月 4日 十勝沖地震、死者・行方不明33人
- 4月 9日 もく星号墜落、37人全員死亡
- 4月10日 NHKラジオ「君の名は」開始
- 4月28日 サンフランシスコ平和条約発効
- 5月 1日 皇居前にて血のメーデー事件発生
- 5月15日 『語文』第二輯(通巻14輯)刊行
- 5月19日 白井義男、ボクシング世界王者に
- 7月19日 戦後初、ヘルシンキ五輪に参加
- 9月17日 海底噴火、八丈島沖に明神礁出現
- 10月15日 警察予備隊、保安隊に改組
- 11月 1日 米、南太平洋で世界初の水爆実験
- 12月20日 東アフリカ沖でシーラカンス捕獲



「血のメーデー事件」となった皇居前広場の様子
 (「朝日新聞100年の重要誌面」より転載)

1953年（昭和28年）

- 1月20日 米大統領にアイゼンハワー氏就任
- 2月 1日 NHKがテレビ本放送を開始
- 3月 5日 ソ連のスターリン首相死去
- 3月14日 吉田茂内閣「バカヤロ」解散
- 5月22日 日本大学国文学会常任幹事会
- 6月 5日 日本大学国文学会幹事会
- 6月14日 日本大学国文学会総会
- 6月25日 九州中心に豪雨、死者・不明1013人
- 7月16日 近畿中心に豪雨、死者・不明1124人
- 7月27日 板門店で朝鮮戦争休戦に調印
- 11月12日 文学部研究発表会
- ～13日
- 12月25日 奄美群島が日本復帰

が頻発し、同年五月一日に「血のメーデー事件」が起こった。翌年三月一日には吉田茂首相の「バカヤロ」発言で内閣総辞職となり、国政の混迷は頂点に達した。こうした中で、銭湯の女湯をカウにしたのは、一九五二年四月一日開始のNHKラジオの連続放送劇「君の名は」だった。その翌年二月一日、NHKがテレビ本放送を開始し、いよいよテレビ時代の幕開けとなった。

【学内外の動き】一九五二年における国文学科では、前年に『国学』から改称の『語文』第三輯が刊行されたのみで、他に特別な動きはみられなかった。しかし、一九五三年に入ると、五月二二日に国文学会常任幹事会、六月五日に同幹事会、そして六月一日四日に同総会が開催され、学会の組織作りに着実な成果がみられた。一方、大学内では、学術研究機関の構築を目指し、一九五三年三月に大学院文学専攻博士課程と東洋史学専攻博士課程が設置された。ちなみに国文学専攻博士課程の設置は、一九六一年三月のことであった。

【国内外の動き】前年に締結されたサンフランシスコ平和条約が一九五四年四月二十八日に発効され、日本は占領を終えて独立を回復した。しかし、「再軍備反対」などを叫ぶデモ



オープンキャンパス風景

(7号館国文学科事務室前廊下の展示コーナー)

キャンパス点描

今どきの大学で、オープンキャンパスを実施しない私立大学は、おそらく皆無であろう。我が文理学部においても、御多分に洩れることなく、今年度は7月と9月に実施完了済み。それにしても、訪れる高校生の顔つきは、真剣そのものである。なお、国文学科の研究室は2002年に研究棟(現2号館)から7号館へ移転している。

掲 示 板

「文理ラジオ」の紹介

学部サイト上にインターネットラジオ「文理ラジオ」を開設しました。

教員によるミニ講義、学部紹介、インターンシップに参加した学生が綴った「インターンシップ日記」など、在学生や受験生のほか、一般の方々にも楽しんでいただける番組をお届けしています。今後随時に新番組を公開していく予定で、リクエストなども受け付けています。

URL:<http://www.chs.nihon-u.ac.jp/radio/>
(田中ゆかり)

2014年7月26日、ミニ同窓会開催

平成7年度入学生の6組から8組までの有志と当時のクラス担任が集まり、学内「秋桜」(コスモス)にて同窓会を開きました。飲食には宴会専用メニューが適用されますが、学食には違いありません。そこに居るだけで、すぐに学生時代に戻れます。同窓会幹事の皆様、今後こうした学食を利用した開催も選択肢の一つに入れてみてはいかがでしょうか。

会報会員募集中

本誌『国文通信』は年2回(6月、12月)の発行です。国文学会の会員には『語文』とともにお送りしていますが、『国文通信』の送付だけを希望される卒業生のために、会報会員の制度を設けています。購読料は**2年分(4冊)1,000円**です。1年分(2冊)500円相当ですが、2年単位でお申し込みください。お支払いは郵便振替口座をご利用ください。

00180-3-11183 日本大学国文学会

郵便局に備え付けの「払込取扱票」通信欄に「国文通信購読料1,000円」と記し、購読開始の号数か年度を付記してご送金ください。卒業年次(何年何月卒)の記入のほか、差し支えなければ職業・勤務先などもお書き添えください。

本誌は国文学科(通信教育部と大学院の国文学専攻を含む)の同窓会組織の確立・拡充を見据えた試みの一つとして発行しています。今後とも会員の増員に向けて、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

原稿募集

本誌は皆様からの投稿を随時受け付けています。詳細は国文通信編集委員会までお問い合わせください。文理学部国文学科のホームページ「お問い合わせ」(画面右上)から編集委員会宛にメールを送ることができます。感想などもお寄せください。

第 2 号

2014年
12月25日発行

日本大学文理学部国文学科
国文通信編集委員会
〒156-8550
東京都世田谷区松上3・25・40

阿部好臣・鈴木晴彦・竹下義人
国文通信編集委員会

◆第2号をお届けする。今号の新しいコーナーは「読書案内」である。一般社会人を読者対象に想定したタイトル通りの内容で、前号の「もうひとつのあとがき」は編者や著者自身に出版前後の顛末を書いていただく企画。これら本に関連する二つの特設コーナーは、他の記事と調整を計りながら適宜に掲載していく予定である。なお、「ゼミだより」も今号から本格スタートした。◆創刊号発行直後から会報会員獲得のための勧誘活動を始め、半年間で三〇名以上の会員増を記録した。発行の趣旨に賛同してくださる方が大勢いる一方で、なかなか入会に結びつかない現実もある。送金手段が郵便局に限定されていることも原因の一つかもしれない。◆七月五日開催の国文学会総会で本誌編集委員会が正式承認された。今号の編集は前号同様、阿部会長ほか臨時委員が担ったが、次号からは鈴木・竹下の二人体制で臨む。(義)

編集後記